

クリスチャン生活：家庭と仕事

コロサイ人への手紙 3:18-4:1 (新改訳聖書)

3:18 妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。19 夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません。20 子どもたちよ、すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです。21 父たちよ、子どもたちを苛立たせてはいけません。その子たちが意欲を失わないようにするためです。22 奴隷たちよ、すべてのことについて地上の主人に従いなさい。人のご機嫌取りのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れつつ、真心から従いなさい。23 何をすることも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。24 あなたがたは、主から報いとして御国を受け継ぐことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。25 不正を行う者は、自分が行った不正を報いとして受け取ることになります。不公平な扱いはありません。4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちも天に主人を持つ者だと知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。

青春物語とはどんなものかご存知でしょうか？物語の冒頭では、主人公は子供や未熟な存在として描かれていますが、何らかの抵抗や葛藤を経て、主人公は大人として認められるようになるのです。物語の中で、彼らは私たちの目の前で成熟していくのです。青春物語のもう一つのとらえ方としては、主人公は世界の中で自分の居場所を見つけようと奮闘しているということです。彼らは子供時代や未熟さを捨て、大人の世界に自分の居場所を見つけなければならないのです。大人の世界は複雑なルールや社会構造でいっぱい、子どもにはほとんど意味がわからないので、大抵の場合、厄介な道のりとなります。大人の世界に居場所を見つけることは、物語を語る場合には、普遍的なテーマです。それは文化の違いを超えています。すべての子どもたちは、社会に属する者として居場所を見つけなければなりません。

コロサイ人への手紙の中で語ってきたことは、青春物語を思い起こさせます。使徒パウロは、偽りの教えに異議を唱え、教会と個々のクリスチャンを守るために、欲望を持った古い自分を捨て、私たちの主イエスに似せて新しくされた人を身につけるように呼びかけたのです。

コロサイの信徒への次の問いは、パウロが語ってきたことをどのように日常生活に取り入れるかです。つまり、私たちはキリストにあって新しくされたのですが、それによって私たちの生活がどのように変わるのでしょうか？

その問いに答えるために、パウロは「上にあるものを求めなさい」という命令を人間関係に持ち込んでいるのです。彼は、日常生活の中でクリスチャンであることの意味を、具体的、実践的に示しているのです。コロサイ人への手紙 3章の前半で、使徒パウロはクリスチャン

生活が霊的生活であるという考えを示しましたが、ここでは、クリスチャン生活がそれだけではないことを示しています。教理を学び、世の中の悪いものを捨て去ることだけがすべてではありません。夫であること、妻であること、親であること、子であること、労働者であること、雇用者であることです。人間の生活の最も一般的な領域において、私たちは主イエスの名によってすべてのことを行うようにと召されているのです。

さて、この聖書箇所が教えてくれることを見る前に、この聖書箇所の中のいくつかのテーマを記しておきたいと思います。まず、この箇所は私たちにはこの世でさまざまな役割があることを示しています。結婚、親子関係、仕事関係などはその一例ですが、この箇所によれば、使徒パウロはこれらの役割のすべてに本質的な平等性を見出しているのです。

家族の中で、ほとんどの家事をしている人がいるかもしれません。より多く収入を提供している人がいるかもしれません。家族の生活のため、日々の雑用をこなさなければならない人がいるかもしれません。しかし、私がここで言いたいのは、あなたの家族が文化的規範に従っているかどうかにかかわらず、家族の全員と仕事は同じ価値を持っているということです。

なぜこのようなことを言わなければならないかということ、すべての家庭で戦いがあるからです。夫は妻に対して自分の力を示そうとします。妻は夫を支配しようとしてします。子どもは親に反抗し、親は子どもの意欲を奪うのです。今このホールにいるすべての家族は、この戦いを抑圧しているか、毎日戦っているかのどちらかでしょう。

使徒パウロがここで指摘しているのは、家族の中のすべての人が尊重され、大切にされるべきだということです。私たちの主イエスより上に立つ家族の支配者はいないのです。

夫もしくは父親は、家族のために自分を犠牲にしてキリストに倣う使命はあっても、家の支配者ではありません。妻もしくは母親は、家族のすべての糸を引く者ではありませんが、キリストに服従し、互いに競い合うキリストの弟子たちに倣うために身を捧げるべきなのです。子供たちは自分の心のままに行動するのではなく、主によって敷かれた道に従うのです。親は過度なルールで子供の人生を支配しようとするのではなく、主イエスを信じる喜びのために、子供の人生を解放することです。

家庭内のすべての関係は、私たちの主イエスにある内なる一致を現すのです。使徒パウロはこのように言っています。

「そこには、ギリシア人もユダヤ人もなく、割礼のある者もない者も、未開の人も、スキタイ人も、奴隷も自由人もありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」(コロサイ人への手紙 3:11)

「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのために、あなたがたも召されて一つのからだとなったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。」(コロサイ人への手紙 3:15)

次に、この箇所で見えたテーマは、互いに守り合うというテーマです。これは、すでに述べた、キリストにある私たちの共通の一致、あるいは平等ということと関連しています。しかし、この世には罪が存在するため、常に支配的な立場をめぐる戦いがあります。定期的にニュースをチェックしている人なら、虐待の報告がない日はほとんどないことをご存じでしょう。世界で起きている虐待のほとんどは、今日お話しするような、家庭や職場での人間関係の中で起きているのです。私たちは、このような場所での虐待が最も痛ましい種類の裏切りであることを知っていますが、それでもなお、虐待は起こり続けているのです。使徒パウロがコロサイの信徒に語ったことは、クリスチャンは愛の律法に従い、救い主に倣うべきだということです。愛は虐待も支配もしない。他人のために犠牲を払うのです。弱い人も強い人も、若い人も年配の人も、男性も女性も、クリスチャンの中で、またクリスチャンの間で、私たちは互いにキリストを示さなければなりません。私たちの行動と言葉によって、私たちには恵み深い救い主がおられることを互いに思い起こさせるのです。私たちはお互いを虐待や不当な扱いなど、この世の危険から守らなければなりません。

そして、私がこれまで述べてきたことと密接に関連しているのが、この箇所に見られる三つ目のことです。それは、私たちの持つすべての関係がいかにかに神と結びついているかを強調している点です。実際、私たちが身を置くすべての人間関係は、何らかの形で神との関係に似ています。それは明白なこともあれば、パウロがこの箇所で述べているように、私たちのために明示される必要があることもあります。ですから、あなたが雇用されて働いていようと、他人を雇って働いていようと、キリストの愛を示すように召されているのです。あなたが犠牲を払う義務があろうと、従う義務があろうと、相手からより多くのものを得るためにこれらのことをするのはありません。あなたは神の栄光を示すために召されているのです。

私たちが子育てに迷う時や、良い配偶者になるにはどうしたらよいかを考えているとき、神がどれほど偉大であるかを忘れてしまうことがあります。困難な仕事の状況に対処しようとするとき、神を忘れてしまうのです。しかし、使徒パウロは、神が神である以上、私たちはすべての人間関係に神の影響を及ぼすべきだと述べているのです。ですから、家族のことであれ、仕事のことであれ、あるいは他のどんなことであれ、今日私たちに課せられた使命は、神の栄光を現すことなのです。そうすることで、私たちは主から、自分たちの人生を豊かにするために必要なすべての知恵と助けを受けることができます。

異なる役割であっても平等であること、あらゆる役割の人々を互いに守ること、そして、神がすべての人間関係に本質的に関与していることを強調したテーマを心に刻みながら、コロサイ人への手紙 3：18 から 4 章 1 節の特定の言葉を見てみます。

18-21 節で、使徒パウロは、「3:18 妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。

19 夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません。

20 子どもたちよ、すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです。21 父たちよ、子どもたちを苛立たせてはいけません。その子たちが意欲を失わない

ようにするためです。」と語っています。

このように、使徒パウロは家族のことから話を始めていますが、その家族というグループには意味があります。私が注目したのは、子どもたちも含まれていることです。パウロは、旧約聖書の中で子どもたちが扱われたのと同じように、子どもたちを扱っています。子供たちは神の民の忠実な一員であることが期待されていました。

さて、手紙のこの段落に含まれている人々のグループの他に、パウロはとても重要なことを言っています。パウロはまず、妻は夫に従うべきであると言っています。使徒パウロは、服従を「主にふさわしいもの」と表現しています。服従が重要なのは、それが「主にふさわしいもの」に根ざしているからです。コロサイの信徒への手紙が書かれた当時も、女性にとって「妻は夫に従いなさい」というのは難しいことだったのでしょうか。私は、妻に助けを求めたり、指示を仰いだりすることがたくさんあります。ですから、パウロが「妻は夫に従いなさい」と言ったとしても、それが男尊女卑の表れであるとは思わない方がよいでしょう。むしろ、この服従の背景には、墮落以前のエデンの園のあり方を回復することがあるのです。

墮落以前、アダムとエバは一つの肉体として共に生活していました。彼らは互いに助け合い、交流し、地を治めると同じ使命を持っていました。つまり、彼らは地を満たし、共に文明を創造するように召されたのです。

しかし、彼らが罪を犯したとき、いくつかの悪い結果がこの世にもたらされました。霊的な死に加えて、二人の間に敵意が置かれたのです。創世記 3:16 には、『女にはこう言われた。「わたしは、あなたの苦しみとうめきを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。また、あなたは夫を恋慕うが、彼はあなたを支配することになる。」』別の言い方をすれば、墮落では、夫は妻を支配するが、妻は夫を支配したいと思うようになるということです。そうすると、妻が夫に従うようにという命令は、墮落の呪いを逆手に取ったものなのです。妻は夫を支配しようとするのではなく、墮落がなかった場合のように、夫に服従すべきなのです。この命令が重要なのは、クリスチャンの結婚が、結婚している人と誰かの結婚生活を目にする人にとって、墮落以前の生活を垣間見せるものでなければならないことを意味するからです。しかし、すべての夫と妻は罪人ですから、垣間見えるものは常に不完全なものであるということを、ここで言う必要があります。しかし、これらの命令に従おうとすると、コロサイ 3:5-17 で最初に話した「脱ぎ捨てる」と「着る」ことを続けなければならないのです。

そして、妻は夫に服従すべきです。私は、妻は常に夫に服従すべきであると言っても過言ではないと思いますが、私が言おうとしていることを修正しておく必要があります。妻は夫のために人間の奴隷になるわけではありません。妻は夫のリーダーシップを助ける存在です。妻は、夫がこの世で生きていくための仕事をするときに、夫を助けるのです。私は、妻が虐待

(言葉、身体、性的)を受け入れることになっているとは思いませんし、妻が罪深い要求に服従することを要求されることもありません。妻は主にふさわしく夫に服従することです。例えば、嘘をついたり、姦淫を容認することは、主にふさわしくありません。ですから、妻は夫の側において、生活の疲れを癒し、労苦を分かち合い、子育ての手助けをし、できる限り喜びをもってそれを行うのです。

一方、19節で使徒パウロは、「夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはけません。」と言っています。この節は、夫に服従せよと命じられると、多くの妻がきっと恐れるであろうことへの完璧な反面教師となっています。もし夫が暴君であれば、服従せよという命令は牢獄のようなものでしょう。しかし、使徒パウロは、夫は妻を愛するべきであると言っています。同じような箇所でも、使徒パウロは、キリストが教会を愛し、教会のために命を捧げたのと同じように、夫も妻を愛することになっていると言っています。この「愛せよ」という命令は、「服従せよ」という命令と同じくらい過激なものでしょう。

夫にはリーダーシップの場が与えられていますが、ここで想定されているリーダーシップのあり方は、私たちがエデンの園に注目させます。アダムとエバは共に生き、同じ使命を与えられていたのです。妻が服従することは、男性が優れているということではなく、クリスチャンの間で罪の影響が緩和されていることを意味します。同じように、男性が女性を支配しようとする罪の傾向は、愛するという命令によって打ち破られます。妻を支配するのではなく、妻を大切にし、妻を守り、妻にとって良いことを行いましょう。使徒パウロはコロサイ3章とエペソ5章で結婚について、実に多くのことを語っていますが、クリスチャンの夫と妻は、墮落以前のような生活を回復するために召されていると言うことに集約されます。

ここで、未信者と結婚している人たちに簡単に言葉を付け加えます。あなたは、これらの命令を拒否するかもしれない相手と一緒にこれらの命令を果たそうとしていることに気づきます。私はあなたに祈りと、この励ましを捧げます。あなたは主イエスに最高の義務と尊敬を負っています。彼は本当にあなたの主人(ご主人)ですから、あなたの力の及ぶ限り、これらの命令に従いましょう。まだ結婚していないけれど、結婚を切に願っている人たち、もしそれが何らかの形であなたにかかっているのなら、クリスチャンと結婚しましょう。

次の節では、親と子の関わりについて見ていきます。旧約聖書で主が命じられたように、子どもは何事にも親に従順であることによって、親を敬うことができます。これは、親の命令が罪深い命令でないことが前提ですが、物事の選択や知恵の問題では、すべて親に従うべきものです。一方、父親は子供を怒らせてはいけません。挑発することは、聖書によれば、落胆につながります。

ここで言う知恵とは、子育ての目的は、たくさんのお金を稼ぐ完璧な子供に育てることではなく、主を知り、主を尊ぶ子供を育てることです。もし私たちが子供を厳しくしすぎると、

成績が良くなり、良い仕事に就けるかもしれませんが、魂は空っぽになってしまいます。子たちよ、あなたがたの従順が喜びに満ち、主キリストに向けられるようにしましょう。そして、親たちよ、子供たちをこの世で成長させ、生活させるために、救いの喜びを思い出してください。この世の闇を照らす唯一の光、イエス・キリストの福音の光に家族の焦点を合わせ、方向を定めてください。

コロサイ 3:18-4:1 で扱われているもう一つの関係は、主人と奴隷の関係です。表面的には、この関係はこの国や私たちの出身地の大部分では法的に存在しません。奴隷制の慣習をめぐる戦争が行われ、奴隷制がなぜ違法とされたかは、奴隷制の歴史を勉強しなくてもわかることです。では、なぜ使徒パウロは奴隷の主人たちに奴隷を解放するよう命じなかったのでしょうか？それは難しい質問ですが、私ができる最善の答えは、彼が新約聖書の手紙の中で強調したのは、彼らが自分自身の置かれた場所で人々を力づけることだったということです。もし、あなたが奴隷にされていることに気づいたら、どうしたらいいのでしょうか？もしあなたがクリスチャンになり、奴隷がいたらどうすればいいのでしょうか？このような問いかけが使徒パウロを動かしているように思われます。この箇所から明らかなのは、使徒パウロが奴隷を主人と同等に見ていたことである。主人に従いなさいという呼びかけは、地上の主人にも主人がいるという事実と隣り合わせにあるのです。私たちは皆、天の主人のしもべなのです。

一方、日本社会では、奴隷制は関係ありません。コロサイ 3:22-4:1 の通常の適用方法は、従業員と雇用主の関係について話すことです。これは正しいやり方だと思いますが、奴隷と主人の関係が、従業員と雇用者の関係とどう違うかを示すために、いくつかのステップを踏む必要があります。まず第一に、奴隷は仕事を辞めることができず、過労から守るための労働者保護法もなかったのです。今日の労働者は権利を持っており、その権利を尊重するよう職場に要求すべきです。

ですから、従業員は懸命に働くべきです。正直に働くべきです。最善を尽くして働くべきですが、給料を上げたいからとか、解雇されるのが怖いとか、そういう理由ではありません。むしろ、神の御国のため、主の御名のために働いているのだと考えなければいけません。「誰も見ていないところでも一生懸命働け」というのは、一般的な労働倫理上のアドバイスですが、クリスチャンはこの考えを修正して、「世の人が見ていないところでも一生懸命働け」と言います。なぜなら、私たちは目に見えない三位一体の神のために働いているからです。

リーダーや雇用主は、労働者を公平かつ公正に扱うという無償の使命を負っています。罪に満ちた世界では不正が横行していますが、クリスチャンのリーダーは公平と正義で知られるべきなのです。

私たちは皆、さまざまな人間関係の中に身を置いています。実際、私たちは何層もの人間関

係を持つことになります。あるときは他人の面倒を見る責任を負い、またあるときは他人の権威に服従しなければならないでしょう。自分が指揮するにしても、誰かの指揮に従うにしても、自分の行動はキリストに倣うべきです。受肉において、主イエスはご自分が創造されたものの姿になり身を低くされ、反抗的な罪人のために命まで捧げられました。それなのに、すべての被造物の主であり、教会の頭なのです。主イエスは王の王なのです。私たちは、イエスを手本としながらも、イエスを自分たちの目標として頼ることができます。私たちは偉大な人間になることを目指しているではありません。私たちが目指しているのは、人々を神の国へ、三位一体の神へと導くことです。それ以上に、私たちは上にあるものを求めているのです。

このメッセージを終える前に、もう一つ考えていただきたいことがあります。健全な人間関係を築くにはどうしたらよいのでしょうか。健全な関係とは、もちろん、対等で互いに守り合う関係であり、神を尊重し充実した関係です。まず私たちは、現時点で自分の人生で接する人々とこのような関係を築きます。自分が犯した過ちや、聖書に書かれている命令に従わない生き方をしたことを悔い改めます。その上で、キリスト・イエスにおいて自分たちが赦されたのと同じように、人を赦すのです。

悔い改め、赦すと同時に、私たちの関心は、地上で満たされることから天での報いへと移っていきます。コロサイ 3 章の始まり方を思い出してください。使徒パウロは、私たちはキリストがおられる「上にあるもの」を求めるべきだということです。奴隷たちは、天の報いのために働いていることを思い出すようにと勧められています。友人関係、学校、仕事、家庭において、私たちは「ことばであれ行いであれ、何かをするときには、主イエスによって父なる神に感謝し、すべてを主イエスの名において行う」（コロサイ 3：17）ことを優先させなければならないのです。地上のことよりも天上のことを優先させることで、現代の基準で人間関係の質を判断することが難しくなります。ですから、自分の人間関係が周りの人と同じかどうかを問うのではなく、自分がキリストに従順であるかどうかを問うべきなのです。

最後に、人間関係にはいくつかの要素が含まれます。それは、関係する人々と三位一体の神です。もし、ある人が愛の律法を避け、相手を支配しようとするなら、その人を変えさせることはほとんどできません。神の呼びかけは、人間に屈することなく、主に従うことです。悪い行いに対して悪い行いで返したり、復讐したりするのは、自然で罪深い反応です。クリスチャンとして、私たちはより高く、より良いものに召されているのです。不当な扱いを受けたときには、自分を守るための手段を取るべきですが、だからといって、キリストに注意を向け続ける努力を免れることはできません。

コロサイ人への手紙 3:1 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。